2023年9月17日（日）
中国新聞SELECT掲載

JICAだより

スリランカ
（1984～86年派遣）
田崎和美さん（62）
大阪府吹田市

農業・養鶏技術教える

三次市にあった畜産試験場で働いていた約40年前、JICA青年海外協力隊のポスターを見て応募し、スリランカ行きが決まった。

配属されたのは国立青年サービス委員会（NYSC）。首都スリジャヤワルデネプラ・コッテから当時バスで4時間、さらに歩いて1時間のベルウッドという農村にある教育施設で12～15歳の女子に6カ月間、農業や養鶏の技術を教えるコースを3期受け持った。

熱帯気候のスリランカでは、蚊を媒体にして発熱や頭痛などが起こるデング熱にかかる人が多い。赴任から1年後、同期隊員のほとんどがこの病気に苦しめられたが、なぜか私はかかることがなかった。それどころか、それまでの貧血が改善され、この国の風土に合っているように感じた。

ベルウッドの教育施設で養鶏の仕方を教える筆者

最初は外国を知りたくて飛び込んだ協力隊だが、現地暮らしを通して知るのは日本のことだった。蛇口から出る水をそのまま飲め、バスや電車は定刻に来る。ご飯に石が入っていない。日本にいれば当たり前のことが実はとてもありがたいことだと実感できた。

だが、スリランカには日本が失いかけている人同士の触れ合いがあった。知らない人でも困っていれば気軽に声をかける。片言の現地語しか知らなかった赴任当初の私にもそうだった。

ある日、知らない人から「あなた日本人でしょ。ここは仏教の国。これを読みなさい」と声をかけられ、日本語の「スッタニパータ」という仏教経典をもらった。その時の仏教のご縁が続き、今は日本で暮らしながらスリランカの仏教大学の学生をしている。オンライン授業でブッダの時代の初期仏教を学んでいる。

若いうちに日本以外の世界を知り、多様な人と交流できたことが、私の人生に大きな影響を与えてくれたのは間違いないようだ。